

コミュニケーション・プロセスとしての生態人類学:
アフリカ熱帯雨林における研究

課題番号 14401013

平成14年度～平成17年度科学研究費補助金
(基盤研究(B)(1))研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者 木村大治
(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 助教授)

コミュニケーション・プロセスとしての生態人類学:
アフリカ熱帯雨林における研究

課題番号 14401013

平成14年度～平成17年度科学研究費補助金
(基盤研究(B)(1))研究成果報告書

平成18年3月

研究代表者 木村大治
(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 助教授)

目次

1	はじめに	1
2	研究組織	3
3	交付決定額 (配分額)	3
4	研究発表	4
4.1	学会誌等	4
4.2	口頭発表	5
4.3	出版物	6
5	研究成果	8
	Bakas' Mode of Co-presence (Daiji KIMURA)	9
	Knowledge about plant medicine and practice among the Ituri forest foragers (Hideaki TERASHIMA)	21
	Food sharing and ownership among the Central African hunter-gatherers: An evolutionary perspective (Mitsuo ICHIKAWA)	37
	カメルーン南東部の狩猟採集民バカにおける貨幣経済の浸透 (北西功一)	51
	中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカにおけるバナナ栽培の受容 (北西功一)	67
	『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊：カメルーンの例 (市川光雄)	87
	アフリカの焼畑と混作 —在来農法の語られ方 (小松かおり)	101
	アフリカにおけるローカルラジオの社会的影響 —ブルキナファソ中部 サポネ村の事例より— (島隆一)	125
	—————以下縦書き—————	
	人はなぜ、平等にこだわるのか —平等・不平等の人類学的研究— (寺嶋秀明)	[59]
	共在感覚 [第I部 第2章 部分掲載] (木村大治)	[11]

1 はじめに

この報告書は、2002年度から2005年度までの4年間にわたって交付を受けた「コミュニケーション・プロセスとしての生態人類学: アフリカ熱帯雨林における研究」(基盤研究(B)(1))研究成果をまとめたものである。

京都大学を中心とした生態人類学的研究は、当初から「自然に強く依存する人々の生き方の記述」を目標としてきた。そこでは人と自然とのかかわりに関心が集中されたが、その結果、生態人類学とは、モノについての定量的なデータを扱う分野であるという印象を強くしてきたと言える。しかし、生態人類学においては、実はすぐれてコミュニケーションな現象が扱われてきたのである。たとえば、狩猟採集民社会における「平等主義」と、その現象的あらわれである「分配行動」は、モノを介した人と人とのコミュニケーションのプロセスであるが、生態人類学においてはこれまで、自覚的に「コミュニケーションの分析」という形で問いが立てられてきたわけではない。本研究は、以上のような視点に立脚し、アフリカ熱帯林における狩猟採集民・農耕民の生態人類学研究を、コミュニケーション論の視点から新たに展開しようという試みである。

以下に、具体的に調査・研究がおこなわれた事項および調査者を記す。(なお、本報告書に収録した文献には*を付した。)

熱帯雨林住民の日常的コミュニケーションの研究

研究代表者・木村はこれまで、アフリカ熱帯雨林に居住する農耕民および狩猟採集民に特徴的な、日本人の常識からすると「特異」と形容することもできるコミュニケーション形態の研究を進めてきた。本研究においては、カメルーンの狩猟採集民バカの会話分析を進め、それらの諸形態を統一的に理解するための描像を得ることができた。この成果は、[木村 2003*]に集大成されており、そのほかにも[木村 2002c; Kimura 2003*; 木村 2004a; 木村 印刷中 b; 木村 印刷中 c]という形で成果を発表することができた。

研究協力者・大石は、狩猟採集民バカと農耕漁撈民バクウェレの生態・社会的関係の研究を進め、バクウェレの漁撈キャンプにおける、定住村とは異なった両者の社会関係のフェーズの存在を明らかにした[大石; Oishi 口頭発表]。

研究協力者・島は、ブルキナファソにおけるローカルFM放送の調査をおこない、対面的交渉と国家規模のマス・コミュニケーションとの中間的な情報媒体の出現によって、人々の間に新たな形のコンヴィヴィアリティが誕生してきているさまを描いた[島 2004*]

平等主義をめぐる理論的研究

狩猟採集民の日常的相互行為の根幹に位置するとされてきた「平等主義」については、研究分担者・寺嶋を中心に精力的な研究がおこなわれ、その成果は[寺嶋(編著) 2004*]にまとめられている。この中には寺嶋の理論的考察のほか、研究分担者・北西[2004b]のアカ・ピグミーの食物分配に関する論考が収録されている。また平等主義に関する木村の考察は、[木村 印刷中 a]の形で出版予定である。

狩猟採集民、農耕民、漁撈民の社会・経済的民族間関係の研究

本研究では、生業を異にする民族間の社会・経済的关系をコミュニケーションという視点から明らかにすることに力を注いだ。[木村 印刷中 c] では、バカの日常会話の中に、共住する農耕民や国立公園を設置しようとしている NGO、国家機関の姿がどのように表現されているかを分析した。研究分担者・市川は [市川 2002*; 2003; 2005a; 2005b] において、地域住民と国家、さらには地球環境問題との関係を考察した。北西は、[北西 2002*; 2003*; 2004a; Kitanishi 2003; 2006] において、狩猟採集民バカの生活・文化が農耕、貨幣経済、学校教育といった「外部」であったものの浸透によってどのように変容しつつあり、また変容に抗しているかを、綿密な現地調査によって示した。

環境に関する知識伝達の研究

アフリカ熱帯林の人々が、自然環境についての豊かな知識を持っていることはよく知られているが、そういった知識がどのように獲得され、コミュニケーションされているかについての具体的研究は少なかった。[寺嶋 2002; Terashima 2003; 2004*; Terashima & Ichikawa 2003] は、イトゥリ・フォレストのムブティおよびエフェの動植物に関する知識の共有状況についての詳細な検討をおこなった。研究分担者・小松は、在来の焼畑農耕と混作について、人々の語り口からの分析をおこなった。[小松 2005*]。

木村は昨年、日本アフリカ学会における生態人類学に関するシンポジウムで、現在の生態人類学のかかえる問題点についての議論をおこなった [木村 2006]。そこでは、地理的なフロンティアを失い、ある種の行き詰まり感をかかえる生態人類学研究に、何らかの形で方法論的なフロンティアを求める必要があることを論じたのだが、本研究は、そこにコミュニケーションというフロンティアを見いだそうという、ひとつの実践的試みである。本報告書はその結実のひとつだが、今後、この報告書を土台にして、さらに多くの成果を生み出していくよう努力したい。

最後に、研究分担者、協力者を代表し、各機関の事務担当者の方々、およびフィールドにおいてお世話になった方々に感謝したい。

2006 年 3 月

研究代表者 木村大治

2 研究組織

研究代表者: 木村大治 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・助教授)

研究分担者: 市川光雄 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授)

研究分担者: 寺嶋秀明 (神戸学院大学人文学部・教授)

研究分担者: 北西功一 (山口大学教育学部・助教授)

研究分担者: 小松かおり (静岡大学人文学部・助教授)

研究協力者: 島隆一 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士課程)

研究協力者: 佐々木経司 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士課程)

研究協力者: 大石高典 (京都大学大学院・理学研究科・博士課程)

研究協力者: 入江晋也 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士課程)

研究協力者: 稲井啓之 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・博士課程)

3 交付決定額 (配分額)

	直接経費	間接経費	合 計
平成 14 年度	2,900 千円	0 円	2,900 千円
平成 15 年度	4,000 千円	0 円	4,000 千円
平成 16 年度	4,600 千円	0 円	4,600 千円
平成 17 年度	1,800 千円	0 円	1,800 千円
合 計	13,300 千円	0 円	13,300 千円

4 研究発表

4.1 学会誌等

木村大治 2002a 「神は細部に宿り給うか? —地域研究における「細部」と「具体」—」
『アジア・アフリカ地域研究』 2: 243-250。

Kimura, D. 2003 Bakas' mode of co-presence. *African Study Monographs Supplementary Issue* 28: 25-35.

木村大治 2004a 「投擲的発話: コンゴ民主共和国・ボンガンドの発話形態における『アドレシ性』の問題」 『社会言語科学会第 14 回研究大会発表論文集』 pp.154-157。

木村大治 2006 「生態人類学と『体力』」 アフリカ研究 68: 80-83。

木村大治 印刷中 a 「平等性と対等性をめぐる素描」『人間文化』。

木村大治 印刷中 b 「フィールドにおける会話データの収録と分析」『講座・社会言語科学 第 6 巻 「方法」』 (田中ゆかり, 伝康晴編) ひつじ書房。

木村大治 印刷中 c 「バカ・ピグミーは日常会話で何を語っているか」『アフリカの力』 (重田眞義編) 京都大学学術出版会。

市川光雄 2002 「『地域』環境問題としての熱帯雨林破壊: カメルーンの例」『アジア・アフリカ地域研究』 2: 292-305。

Ichikawa, M. & D. Kimura 2003 Recent Advances in Central African Hunter-gatherer Studies. *African Study Monographs Supplementary Issue* 28: 1-6.

市川光雄 2005a 「『熱帯アジアの森の民: 資源利用の環境人類学』 (池谷和信編) 書評」『学燈』 102 巻 4 号: 40-43。

市川光雄 2005b 「アフリカ熱帯雨林の歴史生態学に向けて」『紅萌』 8: 9-12。

寺嶋秀明 2002 「イトウリの鳥とピグミーたち」『人間文化』 第 17 巻: 17-31。

Terashima, H. & M. Ichikawa 2003 A comparative ethnobotany of the Mbuti and Efe hunter-gatherers in the Ituri forest, Democratic Republic of Congo. *African Study Monographs* 24 (1, 2) 1-168.

Terashima, H. 2003 Names, use and attributes of plants and animals among the Ituri forest foragers: A comparative ethnobotanical and ethnozoological study. *African Study Monographs Supplementary Issue* 28: 7-24.

北西功一 2002 「中央アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民バカにおけるバナナ栽培の受容」『山口大学教育学部研究論叢』 第 52 巻 1 号: 51-68。

北西功一 2003 「カメルーン南東部の狩猟採集民バカにおける貨幣経済の浸透」『山口大学教育学部研究論叢』 53 巻 第 1 部: 51-65。

Kitanishi, K. 2003 Cultivation by the Baka hunter-gatherers in the tropical rain forest of central Africa. *African Study Monographs Supplementary Issue* 28: 143-157.

北西功一 2005 「狩猟採集民における土地の保有と農耕化に伴うその変化：アフリカ熱帯雨林に居住するバカ・ピグミーの事例から」『特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」“自然資源の認知と加工” 研究班報告 研究集報』 12: 11-25.

Kitanishi, K. 2006 The impact of cash and commoditization on the Baka hunter-gatherer society in southeastern Cameroon. *African Study Monographs Supplementary Issue* 33: 121-142.

大石高典 2005 「バカンスとしての漁撈？～アフリカ熱帯林とバンツー系農耕民～」『生態人類学会ニューズレター』 第 11 号: 19-20.

Oishi, T. in press. Seasonal flooding and traditional use of small 'lakes' with reference to the subsistence of local populations in African tropical forest: A case of Bakuele of Southeast Cameroon. In: *Proceedings of the 11th World Lake Conference held at Nairobi, Kenya (Oct.31.-Nov.4.,2005)* International Lake Environment Committee. 8p.

島隆一 2004 「アフリカにおけるローカルラジオの社会的影響ーブルキナファソ中部 サボネ村の事例よりー」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士予備論文。

稲井啓之 2006 「カメルーン熱帯雨林域における漁撈活動」京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士予備論文。

4.2 口頭発表

Kimura, D. “Bakas' mode of co-presence” 2002 年 9 月, 第 9 回 国際狩猟採集民会議 (CHAGS9) 於 エディンバラ。

木村大治 「投擲的発話: コンゴ民主共和国・ボンガンドの発話形態における『アドレス性』の問題」 2004 年 9 月, 社会言語科学会。

木村大治 「社会的相互行為におけるアドレス性とは何か」(伝康晴, 坊農真弓, 榎本美香, 細馬宏通, 串田秀也, 森本郁代, 高梨克也と共同発表) 2004 年 9 月 社会言語科学会。

木村大治 「生態人類学と『体力』」日本アフリカ学会 2005 年学術大会記念シンポジウム『変貌するアフリカ・変貌する諸学との対話ー生態人類学, 47 年後の意味ー』 2005 年 5 月 28 日 日本アフリカ学会第 42 回学術大会。

木村大治 「コンゴ民主共和国・ワンバ森林の現状」 2006 年 3 月 21 日, 第 11 回生態人類学会研究大会。

Oishi, T. “Traditional use of small 'Lakes' in the Central African rainforest: its significance in the subsistence system of local populations: A case study of small-scale fishing in the

Dja basin of southeast Cameroon” The 11th World Lake Conference, November 1 2005
Nairobi, Kenya.

Oishi, T. “Ethnic group identity modified through repeated immigration in the African tropical forest: A case study on Bakwele shifting cultivators(BantuA-85b) in southeast Cameroon”
World Archaeological Congress Intercongress Osaka 2006. January 12-15, 2006. Osaka,
Japan.

大石高典「バカンスとしての漁撈?～バンツー系焼畑農耕民にとってのアフリカ熱帯林
～」 2005 年 3 月 18 日, 第 10 回生態人類学会大会。

大石高典「『魚を食べに森に行こう!』～カメルーン東南部のバンツー系焼畑農耕民バク
エレの季節的森林滞在型漁撈生活に関する序論的報告～」 2005 年 5 月 28 日, 第 42
回日本アフリカ学会学術大会。

大石高典「カメルーン東南部におけるサブシステンス・フィッシング」 2005 年 6 月 11 日,
第 15 回日本熱帯生態学会年次大会。

大石高典「あそびだってサブシステンスだ!ー中央アフリカ, カメルーンの熱帯雨林のな
かの魚とりの事例からー」 2005 年 7 月 31 日, 第 4 回コモンズ研究会研究発表大会。

大石高典「アフリカ熱帯林における『焼畑農耕民』の半移動型漁撈生活ー空腹とバカ
ンスの間ー」 2006 年 1 月 28 日, 民族自然誌研究会第 42 回例会。

大石高典「バカンスとしての漁撈 part2」 2006 年 3 月 21 日, 第 11 回生態人類学会研究
大会。

島隆一「アフリカにおけるローカルラジオの社会的影響～ブルキナファソ中部サポネ村
の事例より～」 2004 年 3 月 13 日, 平成 15 年度・日本民族学会近畿地区懇談会修士
論文発表会。

4.3 出版物

4.3.1 編著書

木村大治 2003 『共在感覚ーアフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都
大学学術出版会, 326pp.

寺嶋秀明 (編著) 2004 『平等と不平等をめぐる人類学的研究』ナカニシヤ書店 298pp.

4.3.2 分担執筆

木村大治 2002b 「ウーラマ紀行」『アフリカを歩くーフィールドノートの余白に』(加納
隆至, 黒田末寿, 橋本千絵 編著) pp.152-170 以文社。

木村大治 2002c 『「拡散する声」の文化 — コンゴ民主共和国とカメルーンのフィールドから』(松田素二, 宮本正興編)『現代アフリカの社会変動 — ことばと文化の動態観察』pp.408-427 人文書院。

木村大治 2003 「道具性の起源」(西田正規, 北村光二, 山極寿一 編著)『人間性の起源と進化』pp. 293-320 昭和堂。

市川光雄 2003 「3つの生態学: 環境問題に対する生態人類学的アプローチ」(池谷和信 編)『地球環境問題の人類学』pp.44-64 世界思想社。

Ichikawa, M. 2005 Food sharing and ownership among the Central African hunter-gatherers: An evolutionary perspective. In: *Property and Equality*. Widlok, T. & W. Tadasse, eds, pp.151-164 Berghahn, Oxford.

市川光雄 印刷中 「ムブティ・ピグミー: 森の民の生活とその変化」(福井・竹沢編)『ファースト・ピープルズ〜世界先住民族の現在 第5巻 サハラ以南アフリカ』明石書店。

Ichikawa, M. in press. Animal food avoidance among Central African hunter-gatherers In: *Animal Symbolism* Dounias, et al., eds., LACITO-CNRS, Paris.

寺嶋秀明 2004 「人はなぜ, 平等にこだわるのか — 平等・不平等の人類学的研究 —」『平等と不平等をめぐる人類学的研究』(寺嶋秀明編著) pp.3-52, ナカニシヤ出版。

Terashima, H. 2004 Knowledge about plant medicine and practice among the Ituri forest foragers In: Widlock, T. and W. G. Tassese (eds.) *Property and Equality*. Vol.I. pp.47-61 Berghahn, Oxford.

北西功一 2004a 「狩猟採集民バカにおける学校教育の導入 — カメルーン南東部ドンゴ村の事例から —」『英語教育学研究』岡紘一郎編, pp.239-256 溪水社。

北西功一 2004b 「狩猟採集民における食物分配と平等 — コンゴ北東部アカ・ピグミーの例 —」『平等と不平等をめぐる人類学的研究』寺嶋秀明編著, pp.53-91 ナカニシヤ出版。

小松かおり 2005 「アフリカの焼畑と混作-在来農法の語られ方」『文化人類学研究('05)』本多俊和、大村敬一、葛野浩明編, pp.171-193 放送大学教育振興会。

4.3.3 その他の出版物

木村大治 2002d 「言語人類学」『情報学事典』p.271 弘文堂。

木村大治 2004b 「身体的人类学」解説『文化人類学文献事典』pp.103-104 弘文堂。

Ichikawa, M. 2002 Comment on 'The vines of complexity: Egalitarian structures and the institutionalization of inequality among the Enga' by Polly Wiessner. *Current Anthropology* 43(2): 258-259.

寺嶋秀明 2004 「狩猟採集民の平等規範」『文化人類学文献事典』p.769 弘文堂。